



探査機を使って土中の不発弾を探査するラオス人の女性スタッフ

特別レポート



北澤豪さん

紛争のつめ跡を

訪ねて

inカンボジア&ラオス

2 月中旬、カンボジアの首都プノンペン。近年、成長著しいこの街には近代的なビルが立ち並び、道路は車やバイクでこった返している。「街も人も活気にあふれている。来るたびに成長を実感するね」

紛争終結後、人々の生活に暗い影を落としている地雷や不発弾。その存在は、開発途上国の発展にも影響を及ぼしている。今年2月、JICAオフィシャルサポーターの北澤豪さんは、その現実を確かめるため、カンボジアとラオスの現場を訪ねた。



カンボジアで除去作業中の地雷を間近に見る北澤さん

ん。カンボジアを訪れるのはなんと今回が5回目。2004年からJICAオフィシャルサポーターとして十数カ国を訪れている彼にとっても、特に「思入れの深い国」だ。

北澤さんは途上国を視察する時、いつも何らかのテーマを設けている。今回は「地雷」と「不発弾」。そう、カンボジアには、内戦時に埋設された地雷やベトナム戦争時に落とされた不発弾が、現在に至るところに眠っているのだ。この現実、私たちにとっても他人事ではない。あまり知られていないが、国内唯一の地上戦の舞台となった沖繩では、いまだ年間800発の不発弾が発見、処理されているのだ。「終戦から

半世紀以上が経った日本でも依然として不発弾が残っている。途上国にも同じ問題を抱えた国があることを、自分の目で現実を確かめた上で伝えたい。そんな思いで日本を飛び立った。

北澤さんは、地雷の被害が特に深刻な北西部のバットバンを訪ねた。カンボジア地雷対策センター(CMAC)のスタッフの案内で、自らの足で現場を見て回った。CMACはこの国の地雷除去を一手に担う政府機関で、JICAが1998年から続けている地雷除去支援のパートナーでもある。「人の命を守る上で必要不可欠な活動ですね」と北澤さん。地雷探査機材、地雷除去支援機材・車両の供与などを通じて日本

が支援を続けてきたことを聞き、「カンボジアの発展は、CMACとJICAによる協力の成果の表れだ」と感じしていた。

世界で最も多くの「爆弾」が眠るラオス

続いて北澤さんが訪れたのは、歴史上、一人当たり最も多くの爆撃を受けた国ラオス。しかしその事実を知る人はそう多くない。ベトナム戦争時に投下された爆弾の総量は200万トン超。現在も約8000万発がベトナムとの国境地帯を中心に残っており、年間約300人が爆発事故により被害を受けている。被害に遭っても届けがないケースも多く、実際の被害者数は計りられない。

ラオスの政府機関「ラオス不発弾処理プログラム」による除去サイトを訪れた北澤さん。不発弾がある場所には、赤いマーキングがされている。辺り一面、見渡す限り「赤」だ。

北澤さんは地域住民と言葉を交わす中で、住居のすぐ脇にも不発弾が眠っていること、何の罪もない人々が突然被害に遭ってしまうという現実、ショックを受けていた。不発弾問題に直面する地域は、ラオスの貧困地帯と呼ばれている場所。農作業も満足にできず、貧困から抜け出せない状況に陥っているという。

ラオスでは不発弾による被害を防ぐため、コミュニティや小学校などでの教育が進められている。しかしそれ



「ラオス不発弾処理プログラム」のスタッフから、不発弾の構造や威力について説明を受ける

でも、やはり悲劇は起きてしまうのだ。北澤さんは「これほど状況が深刻だとはまったく知らなかった。除去を進めることはもちろん、被害に遭った方たちの心のケアなど、彼らを支える制度整備も必要だと感じた」と話していた。JICAはカンボジアで行ってきた地雷処理支援の経験と、その中で蓄積されたCMACの知見を生かし、今年からラオスでの支援をCMACと協働で実施する予定だ。

カンボジアとラオスでは、途上国視察恒例のサッカー交流を子どもたちと楽しんだ北澤さん。かつて地雷や不発弾があつて足を踏み入れられなかった土地で、伸び伸びとサッカーをする子どもたち。その姿をうれしそうに見ながら「時間はかかるが成果は確実に出ている」と実感した。

2カ国の訪問を通じて、紛争の「負の遺産」と闘う人たちに出会った北澤さん。「どこでも当たり前前にサッカーができるわけではない。元サッカー選手として、スポーツを通じて世界が平和になるように自分にできることをやっていきたい」。これからも自分の目で確かめた途上国の現実を、日本の人々に伝えていく覚悟だ。



子どもたちとサッカーを通じて交流。北澤さんはかつてこの地でも多くの地雷が見つかったと聞き「彼らが安心して走り回れる環境が必要」と話した